事態把握を軸にした類型論の予備的考察
―再帰的受益者主語構文を中心に―

小　熊　　猛
人間文化学部国際コミュニケーション学科　准教授

0．はじめに

対照言語研究および類型論的研究では，「受動構文の対照比較研究」のように，しばしば分析対象とする言語の特定の言語構造ないしは対応構文を対照させるアプローチが主流であると言える。例えば多くの類型論研究者によって，態（voice）が諸言語においてどのような言語形式（構文）で実現されるか，といった研究が精力的に行われている。これらの研究とは一線を画し，本稿は言語構造ではなく「再帰的受益および被害」という事態把握を軸にした類型論的認知語用論研究を試みる。[1]

英語の *Mary had a walk in the garden.*[2] のようなタイプは，「気晴らし」，「評価・査定」，「実感」といった行為主体の〈心理的受益〉に焦点を当てる事態把握を反映するものであり，当該の言語形式（構文）そのものがその意味的貢献を担っている。本研究は，このタイプは経験者主語構文とも質的に異なる独立した構文であるとする先行研究（Wierzbicka（1988））を出発点として，日本語の「V テミル」試行構文がこの構文と密接な機能的類似性を示すことを明らかにする。また，アイヌ語，フランス語にもこれに対応すると考えられる関連表現が存在することを指摘し，この「再起的受益ならびに被害」タイプの事態把握が人間の生活に根差した一群の行動形態を纏め上げる概念範疇であり，他の言語においても一定の語用論的な機能単位を構成していることの一端を明らかにすることを目的とする。

1．Have a N（construction-dependent noun）構文

英語には同一の事態を表す表現として単純な自動詞文（1a）に加えて，（1b）の例に示すような表現[3]が存在する。（1b）には，（1a）には観察されない特別な意味が伴うことが報告されている（Wierzbicka（1988）；Dixon（1991））。

（1）　a. Mary walked around the town.
　　b. Mary had a walk around the town.

1.1 独立した構文としての位置づけ

（1b）のタイプは，主語参与者が「気晴らし」や「癒し」などを期待して意図的に行為を行う事態を表す。本稿では，便宜上 Have a N（construction-dependent noun）構文と呼ぶことにする。次の（2b）は形式上類似するが，行為の意図性を欠いているためこの構文には分類されない。（3b）についても，主語 *I* の指示対象が対応する基本文（3a）の主語とではなく目的語と一致するため別の構文として分析される。[4]

（2）　a. He looked feverish and ill, and coughed badly.
　　b. He looked feverish and ill, and had a bad cough.
　　（BNC: GWH1526）

（3）　a. The horse kicked me.　（Dixon 1991: 339）
　　b. I had a kick from the horse.　（ibid.）

Wierzbicka（1988）は，次の引用にあるように，（1b）のタイプを Have a V-stem 構文と呼び，経験者主語 Have a N 構文とは明確に区別する必要があると述べている。つまり，（1b）における *walk* はあくまでも V-stem であって，（2）のゼロ接辞派生名詞 *cough* とは異なるという分析である。

> …the verbal stem in sentences like *He had a swim or She had a lie down* <u>is not a noun</u>, despite the fact that it combines with an indefinite article; and it can be distinguished from deverbal nouns with zero suffix, e.g. *smile, cough,* or *quarrel* in *She has a nice smile*; *He has a nasty cough*; *They had a quarrel.*
>
> ［Wierzbicka 1988: 295, 下線は筆者による］

本稿も（1b）のタイプを独立した構文として，（2b），（3b）のタイプと区別する立場を採るが，その違いを形態的に同一形式であるゼロ接辞派生名詞（N）と動詞語根（V-stem）の違いに求める要素還元主義的な記述は行わない。[5]

この構文は自動詞文に対応する（1b）のようなものが多いが，他動詞文に対応する（4b）のような事例も少なくないと報告されている（Dixon（1991: 344））。Wierzbicka（1988）は，このような他動詞文

に対応する事例に関して，この構文の *have* は「脱他動化詞」(de-transitivizer) として機能し，〈行為〉の対象物にかかる叙述，つまり〈行為〉局面を背景化すると論じている。この脱他動化については (4b) が受動化を許さないことからも確認できる。

(4) a. I kicked the ball. (Dixon 1991: 339)
b. I had a kick of the ball. (ibid.)

1.2 反映する事態把握と意味構造

Wierzbicka (1988) は，「歩く」という行為の主体 (i.e. *Mary*) は本来的に〈行為者役割 (agent role)〉と〈経験者役割 (experiencer role)〉を併せ持つ[6]と指摘した上で，(1b) では当該の行為が *Mary* の〈経験〉として事態把握されていると論じている。つまり，(1b) のタイプを〈行為〉局面から〈行為に伴う経験〉局面へと意識・関心を移す (conceptual focus shift) 構文であると分析している。概念化者 (conceptualizer) が同一事態を「主語参与者の経験」として事態把握するときこの構文が選択されるというわけである。

この構文の主語参与者は「気晴らし」や「癒し」など自らへの〈心理的受益 (beneficiary)〉を期待して，意図的に行為を行うことから，実は単なる〈経験者〉というよりは〈再帰的受益者 (reflexive recipient)〉と分析されるべきである。利益を与える〈行為者〉とそれを受ける〈受益者〉が同一人物となる用法は，再帰的受益・影響 (reflexive benefactive/affectedness) と称すべき出来事の概念化を表現する形式と見做し得る。したがって，英語の Have a N (construction-dependent noun) 構文は事態把握を軸にした類型においては「再帰的受益者主語構文」に分類される。

1.3 完結性および遂行目的の制約

英語の Have a N (construction-dependent noun) 構文は，対応関係にある基本動詞文とは統語的に異なる振る舞いを示すことが指摘されている。(1) の前置詞句 *around the town* を〈着点〉を表す前置詞句 *to the station* (例文中の下線部で示す) に置き換えると，基本動詞文 (5a) 対応する (5b) は容認されない文となる。

(1) a. Mary walked around the town. (再掲) [atelic]
b. Mary had a walk around the town. (再掲) [atelic]

(5) a. Mary walked <u>to the station</u>. [telic]
(Wierzbicka 1988：298)
b. *Mary had a walk <u>to the station</u>. [telic]
(Wierzbicka 1988：298)

Wierzbicka (1988) によれば，〈着点〉を表す前置詞句 *to the station* (例文中の下線部で示す) は目的地への到着という物理的移動を言語化しており，これは当該の移動行為の〈完結性〉(telicity) および〈遂行目的行為 (external goal)〉を表し，これが行為者性の背景化を阻むため，〈経験〉局面が前景化された事態認識を反映する Have a N (construction-dependent noun) 構文 (5b) と相容れないと分析している。

しかし，大規模コーパス British National Corpus を検索すると，実際には〈完結性〉(telic) および〈遂行目的〉(purpose) を示す要素を伴う Have a N (construction-dependent noun) 構文が以下の (6)，(7) に示すように確認できる。

(6) I've got to have a walk up <u>to [the] post office</u> in a bit. [telic]
(BNC: KD8 5190)

(7) Cos I thought it would, it was such a warm day I thought it would be quite nice for him to have a walk <u>see if he was alright</u>. [external goal]
(BNC: KBW 8770)

(6) では〈着点〉を表す前置詞句 *to [the] post office* が，(7) では遂行目的が明示的に現れている。

この事実を踏まえると，〈行為〉局面と〈経験〉局面のいずれが前景化されるかというのは実は相対的程度の問題であると考える必要がある。

1.4 心理的な再帰的受益

Have a N (construction-dependent noun) 構文は二つの特徴を有する。一つは，主語参与者の「気晴らし」(pleasure) や「癒し」(relief) といった〈心理的受益〉を意図した事態として言語化すると点である。もう一つは，利益を与える〈行為者〉とそれを受ける〈受益者〉が同一人物となる用法は再帰的受益・影響 (reflexive benefactive/affectedness) と

称すべき出来事の概念化を表現する形式と見做し得るという点にある。

この構文の表す受益の事態把握（construal）は，再起代名詞の生じる（8）の事態把握とは，（i）影響（affectedness），（ii）意図性（volitionality）の点で質的に異なる。

（8） a. He spoke to himself.
b. Don't work yourself sick.
c. Sam talked himself hoarse.
（Goldberg 1995: 194）

（8a）は典型的な再帰表現である。（8b），（8c）はいわゆる疑似目的語（fake object）が現れる結果構文（resultative construction）であり，それぞれ「働きすぎて体をこわすなよ」，「サムは話し過ぎでがらがら声になった」というような意味を表す。これら（8a）-（8c）は，〈行為者〉と〈被動者〉が同一人物であることから再帰的であるが，いずれも物理的行為連鎖としての事態把握を反映しており，自らへの心理的受益とは解釈できない。

2．日本語における再帰的受益者主語構文

英語の Have a N（construction-dependent noun）構文は，心理的な再帰的受益・影響と呼べる事態把握を反映すると考えられるが，日本語ではどうであろうか。まず頭に浮かぶのは（9）のようなタイプではないだろうか。しかし，このタイプの表現に生じうる動詞は「歩く」「巡る」など限定されており，その生産性は低い。

（9） 街を（気晴らしに）一歩きした。

2.1「V テミル」試行構文

一方で，日本語には Have a N（construction-dependent noun）構文の表す様々な〈心理的な再帰的受益〉を言語化し得る機能的類似構文として（10）のタイプが観察される。（10b）の敬語形式「ごらん」からも明らかなように，この「V テミル」タイプは知覚動詞「見る」をルーツとする複雑述語と分析される。

（10）a. 街を（気晴らしに）歩いてみた。
b.（ちょっと）見せてみて［ごらん］。
（11）거리를 걸어봤다.（街を歩いてみた。）

「V テミル」は一般に「試しにしてみる」という試験的な行為〈試行（try -ing）〉を表すとされる。〈試行〉にも必然的に物理的〈行為〉局面と〈行為に伴う経験〉局面がある。後者が相対的に前景化して〈心理的な再帰的受益〉事態把握を表す「V テミル」構文の下位類[7]へと展開したと考えられる。興味深いことに，「V テミル」に対応する韓国語表現（11）には〈試行〉解釈しかない。韓国語においては，〈行為に伴う経験〉局面を前景化する拡張（extension）が生じていない言うわけである。〈心理的な再帰的受益〉の事態把握が韓国語でどのような文法的方略を用いて言語化されるかを探る必要が今後の課題として残る。

2.2「V テミル」試行構文と完結性および遂行目的

英語の Have a N（construction-dependent noun）構文は自動詞文に対応するタイプがより生産的であり，更には自動詞文であっても完結性や遂行目的の明示といった要素がこの構文での言語化を阻む傾向にあることを1.3節で観察した。

一方，V テミル構文は，（10a），（12b）が示すように他動詞文に対応する表現も非常に生産性が高く，以下で確認するように，構文の容認度は完結性や遂行目的の明示と相関を示さないという点で振る舞いが異なる。

（12）a. ボールを蹴った。
b. ボールを蹴ってみた。
（13）東京スカイツリーを見に，墨田区まで歩いてみた。
（14）駅｛まで /?? へ /?? に｝歩いてみた。
（15）a. 駅｛まで /?? へ /?? に｝歩いた。
b. 駅｛まで / へ / に｝行った。
c. 駅｛まで / へ / に｝歩いて行った。

まず，（13）は V テミル構文において遂行目的の明示が可能であることを示している。次に完結性についてであるが，一見すると，（14）の「駅へ」「駅に」が不自然な事実は完結性制約が V テミル構文にも観察されることを示すように見える。しかし，これは日本語が動詞枠付け言語（satellite-framed language）であることに起因するものであることが（15）から分かる。ここでは，移動経路表現の言語類型（Talmy 1985, 1991）の詳細に立ち入ることはせず，事実関係のみを確認するにとどめることにす

る。(15) より，主動詞が移動そのものを表す動詞「行った」の場合は助詞「へ」および「に」と共起するが，「移動」そのものではなく「活動」を表す動詞「歩く」の場合にはこれらの助詞とそもそも共起し難いことが分かる。つまり，(14) に観察される振る舞いはVテミル構文に起因するものではないというわけである。

2.3「V テミル」構文のプロファイル

知覚動詞「見る」は (16) に示すように受動化が可能であるが，Vテミル構文は英語の Have a N (construction-dependent noun) 構文と同様に受動化を許さない。次の (17) が示すように，複雑述語のいずれの部分に対しても受動化が認められない。

(16) 情けない姿［ところ］を見られた。
(17) a. * ボールが蹴られてみた。
b. * ボールが蹴ってみられた。

これは，まさに〈行為〉局面ではなく，〈心理的受益〉局面をプロファイルしているからに他ならないと言えよう。日本語のVテミル構文と英語の Have a N (construction-dependent noun) 構文は，完結性や遂行目的の明示という点で異なる振る舞いを示すが，**再帰的受益者主語 (Reflexive Agent-Recipient Subject) 構文**として統一的に捉え直すことができる。

3．その他の言語における再帰的受益者主語構文

1節および2節において，英語ならびに日本語の〈心理的な再帰的受益〉という事態把握を軸にした構文を分析したが，アイヌ語，フランス語にも「Vテミル」に機能的類似性を示す、ないしは関連すると思われる表現が観察される。これらにも心理的な〈再帰的受益〉解釈が反映されているのだろうか。

アイヌ語の (18a)，(18b) は「行ってそして見て」，「食べてそして聞いて」のように，知覚動詞が後続する表現であり，〈経験〉局面を前景化していると議論できそうである。また，(19) のフランス語において強意語として分析される voir の事例も，詳細に調べる必要があるが，「見てみて」，「聞いてみて」，「言ってみて」に対応しているようにも思われる。

(18) AINU
a. soy ta e=asin wa e=inkar yakne, ...
outside at you=go and you=look when
'When I went out and looked, ...'
b. okamkino an=e wa inu=an hike....
deliberately I=eat and listen=I when
'When I deliberately ate it and listened, ...
(Izutsu 2004: 161)

(19) FRENCH (※命令形の後で強意語として)
a. Voyons voir. (どれどれ，何だって。)
b. Écoute voir ce qu' il dit.
(とにかく彼の言っていることを聞けよ。)
c. Dites voir. (まあ言ってごらんなさい。)
(ロイヤル仏和中辞典 1991: 1982)

4．おわりに

本稿では，Have a N (construction-dependent noun) 構文および日本語のVテミル構文が機能的類似性を示すことを明らかにし，アイヌ語および韓国語にも類似，関連する言語現象があることを示し，「再帰的受益および被害」という事態把握を軸にした類型論の可能性を展望した。

また，心理的ドメインでの再帰的受益に注目し，関連する事態把握の言語化パターンを言語・文化横断的な観点から探り，その意味と機能に認知言語学的にアプローチすることの重要性を示した。

本稿で扱った〈再帰的受益〉事態把握は，(i)〈心・身の癒し〉，(ii)〈試行〉，(iii)〈試験的評価・査定〉，(iv)〈実感〉のように幾分異なった現れをするが，いずれの現れも「主語参与者が自らの〈心身的受益の下位類に属する「益」〉を意図した行為」という共通の概念化として認知的に捉え直すことができる。

〈再帰的受益〉事態把握は，歴史的・地理的に多様な言語で範疇化され，一定の言語形式として文法化されていることが予測される。言語類型論的には，再帰的受益者主語構は概ね，以下によって実現されると予測される。

(i)〈知覚〉および〈所有〉構文
(ii)〈試行〉構文，
(iii) 他動性の低減 (自動詞化，不定目的語)
(iv) 述語語幹の名詞化 (reification) + 軽動詞)

[1] 本研究は2013年に国際認知言語学会第12回大会 (ICLC 12th) での研究発表 Have a N (verbal-

stem) Periphrastic Verbal Construction: A Reference-Point Model Approach の内容に大幅に加筆を加えたものである。

[2] Wierzbicka (1988: 297) によると，このタイプの表現は極めて口語的であり，またその使用には地域によって大きな違いある。アメリカ英語においては，*have* ではなく *take* が現れる関連表現が多用され，イギリス英語に比べ，このタイプの表現の使用頻度は著しく低いと報告されている。

[3] Dixon (1991: 338) は，古い文献資料には口語的表現を見つけることがそもそも難しいと断った上で，*have a run* という事例は1450年にその使用例が確認でき，ここ200年でこのような表現が増加したと報告している。

[4] Dixon (1991: 339-344) は，この構文であると判定する基準として，同じ命題内容を表現しつつも対応する基本文には観察されない特別な意味を伴うという意味的特徴に加え，次の基準を挙げている。

a. the same subject as the basic sentence
b. a plain verb base form
c. adverb/adjective correspondence
d. preservation of peripheral constituents

[5] 不定冠詞 *a* に後続するにも拘わらず *walk* を派生名詞 (N) ではなく動詞語幹 (V-stem) であるとする分析 (Wierzbicka (1988)) の論点は，この文構造全体を構文として捉えるべきという点にある。比較相関構文 (The 比較級…, *the* 比較級…) において，定冠詞 *the* に後続するという統語的環境を根拠に比較級部分 (形容詞ないし副詞) を名詞相当とは分析すべきでないのと同様に，ここでの *walk* を単純に派生名詞と分析すべきではないという主張であると解される。

[6] Langacker (2009: 239) も動詞 *walk* の主語はしばしば〈行為者 (agent)〉役割と〈移動主体 (mover)〉役割を併せ持ち，動詞 *kick* の目的語は〈経験者 (experiencer)〉役割と〈被動者 (patient)〉役割を併せ持つ，というように事態内参与者がしばしば二重の意味役割を担うことがあると指摘している。

[7] V テミルには他にも下位類がある。「こんどまた地震でもおこってみろ，…」のような，テミル条件文構文については菊田 (2013) を参照。

主要参考文献

Dixon, R.M.W. (1991) *A New Approach to English Grammar, On Semantic Principles.* Oxford: Oxford University Press.

Goldberg, A. (1995) *Constructions. A Construction Grammar Approach to Argumet Structure.* Chicago: University of Chicago Press.

Izutsu, K. (2004) A Cognitive Grammar Approach to Ainu. In Katsunobu Izutsu (ed.), *The Ainu Language: A Linguistic Introduction.* Asahikawa: Hokkaido University of Education.

菊田千晴 (2013)「テミル条件文にみられる構文変化の過程―語用論的強化と階層的構文ネットワークに基づく言語変化」山梨正明 (編)『認知言語学論考』No.11. ひつじ書房 . 163-198.

Langacker, R. (1999) *Grammar and Conceptualization.* Cognitive Linguistic Research 14. Berlin: Mouton de Gruyter.

Langacker, R. (2008) *Cognitive Grammar : A basic introduction.* Oxford: Oxford University Press.

Langacker, R. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation.* Chicago: University of Chicago Press, Chicago.

Talmy, L. (1985) Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms. *Language Typology and Syntactic Description, vol. 3: Grammatical Categories and the Lexicon,* ed. T. Shopen, 57–149. Cambridge University Press.

Talmy, L. (1991) Path to Realization: a Typology of Event Conflation. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 17: 480–519.

Wierzbicka, A. (1988) *The Semantics of Grammar.* Amsterdam: John Benjamins.